



自然の解説者

夏季号

2010年7月5日

NPO 法人

ぐんま緑のインタープリター協会紙

[夏季号] 第28号

事務局：〒370-0006 高崎市問屋町1-4-1

センチュリー高崎問屋町605

大石 紘一様方

編集：総務・企画部会

公開講演会「これならできる獣害対策」

平成22年3月5日沼田市グリーンベル21で開催された沼田市主催の講演会の要約

講師 近畿中国四国農業研究センター鳥獣害研究チーム長 井上雅央氏

講師は元農業改良普及員としての現場経験豊かな獣害対策のスペシャリストで、鳥獣被害撲滅のため全国を股にかけて奔走されている。

講演内容

野生動物の農林産物被害は今や全国に広がっており、過疎化高齢化の進む山村にとって深刻な問題になっている。一般的には温暖化、人工林化、過疎化・高齢化、猟師の高齢化が原因のように言われているが、激化する原因はもっと他にある。昔は、被害はたいしたことがなかった。人間と野生動物の住空間は分かれており、野生動物の数は自然の食物の豊凶により増減したが自然淘汰などによりうまくバランスがとれていた。それでは、今日

1 なぜ被害が激化するのか

野生動物は人間の住空間に入り込み餌付けを学習した。

2 集落にある鳥獣の餌

① 人間が怒る餌～出荷する果実、野菜、剪定後の枝の芽、納屋の有機肥料

② 食っても誰も怒らない餌～管理放棄園の新芽、花、果実、剪定枝の冬芽、冬場の果樹園の緑草、投棄クズ果、道路法面の豆科の草類

餌は農産物だけとは限らない、一年中餌にありつけ、栄養状態よく毎年出産できる。

3 対策は獣から学べ

① 狩猟を行った時だけ逃げ～他の人は見ても追っていない証拠

② 爆竹や花火はすぐ慣れる～音はしても怖くないという使い方をした証拠

③ いつも管理放棄園に来る～自分の園以外は追う人がいない証拠

④ どんな柵でもだめだ～入られてもバージョンアップしない証拠

目の前で起きていることをちゃんと理解するのが大切

4 鳥獣害対策の順序～優先順位①→④

① みんなが餌付けとは何か、被害とは何かを勉強する

② 守れる圃場、餌場と認識しにくい集落へ向けた環境改善

③ 柵の設置や追い払い

④ 有害駆除など

火事に例えると、①～②は日常から心がける防火、③は当事者が行う初期消火、④は消防の消火活動

①～②をやらずに③から始めて被害が止まるはずがない。

しかし、被害地では「防火が大事というような悠長なことを言うところ場合やない。もう、火事がおきているのだから、とにかく撃つか捕らえて殺すという駆除のことを考えよ」という意見も多い。

だが、実際は、「早く消せと消防に言いながら集落のみんながバケツで灯油やガソリンをかけて歩いている」ような状況といえる。

とにかく餌付けを減らさない限り状況は悪くなる一方、自分たちのまわりには鳥獣の餌が一杯、当たり前のことなのに皆が意識していない。

捕獲や柵設置など沢山の経費を使っての対策は対症療法であって抜本的解決にはならない。とにかく頭のスイッチを切り替えて皆で守る体制を作らないと守れない。

現に、全国には皆で取り組んで成功した事例が沢山ある。

＜協会活動のトピック＞

22年度 自然の解説者養成講座

当協会主催の「自然の解説者養成講座」は9期生を迎えることとなりました。

前任者から受け継いで、人が集まるのかと心配しましたが、協会の実績と協会員の協力、さらに上毛新聞への広告掲載（群馬日産グループのご協力）などにより、順調に集まり、定員20名のところ28名の応募がありました。しかし、2名の方から都合がつかなくなったという連絡があり、結局26名の受講生で開講となりました。



4月25日前橋市総合福祉会館で開講式が行われました。亀井理事長よりインタープリターの歴史や活動についての詳しい説明があり、受講生は熱心に聴き入っておりました。ガイダンスの後、小崎昭一氏により「自然の解説者とは何か」「解説者の役割」についての解りやすい説明があり、すぐにネイチャーゲームに入りました。次回5月9日もネイチャーゲームを体験し、自然解説者の面白さを実感したのではないのでしょうか。そして、第3回の「植物に関する基礎知識」では、初めはかなり専門的な座学ではありましたが、関端孝雄先生の軽妙にしてユーモアのある講義に、時々笑いも出て、解りやすく楽しい授業となりました。午後は、天気が良かったので早めに講義を終え、外に出ました。まず野鳥病院を見学。普段は見られない種々の鳥の治療の実態を見るという貴重な体験をさせていただき、さらに園内を巡り、植物の不思議に驚かせられ、楽しく講座を終了いたしました。今年度も楽しく養成講座が進むことを願っています。

＜活動報告＞

敷島公園まつり 4月29日（昭和の日） 当協会主催（受託協力部会 緑の募金活動事業）

今年の「敷島公園まつり」はあいにく午前中に小雨が降り出し、客足が心配されたが、午後には晴れあがった。会場周辺の人通りは昨年より少ないながらも当協会のテントを訪れる人の数は順調に伸び、午後2時頃にはシノ笛、竹トンボ、バードコールは品切れになるほどでした。緑の募金には28,000円が集まりました。協会参加者19名の皆様ご協力ありがとうございました。



緑のインプリの森整備 5月8日（土）当協会主催（緑のインプリの森部会 インプリの森整備事業）

快晴に恵まれ、新緑目にまぶしいインプリの森で今年度最初の整備を19人が参加して行いました。安全祈願を行った後、大松顧問よりインプリの森の歴史と管理方針の説明がありました。作業に入る前に区域内の歩道や倒木の状況を確認し、その後木村協会員を講師にチェーンソーの構造や取り扱いなどについて詳しい説明を受けました。午後からは風倒木の伐採や玉切りなど実地指導があり、特に初めての新入会員には便利さと危険性が背中合わせであることを知る貴重な体験になりました。



赤城山の生い立ち研修 5月15日（土）当協会主催（総務・企画部会 会員資質向上研修）

講師に菅野重也氏（日本地質学会会員）を迎え、協会員35名と登山協力の児島さんを加えた計37名が参加して赤城山の生い立ちを学びました。長七郎山山頂では南東側の外輪山の欠けている理由について学びました。長七郎山山頂の火山岩は小沼火山から噴出したもので、流理（流れた紋様）が見られるものや色が赤っぽいものから白っぽいものまでありますが、含まれている結晶などの成分から石英安山岩と判定されます。長七郎山の斜面を降りると途中から岩が変わり火山灰の堆積岩である凝灰角礫岩が見られました。オトギの森に下りる途中では噴気孔跡と思われる10mほどの傾いた石柱を観察し、小滝に下りてオトギの森湖の厚さ10mもある湖成層を観察し、外輪山の割れ目を粕川が侵食してできた切り立った深い谷の銚子の伽藍まで行くことができました。赤城火山の成り立ちを直に感じ取れた大変有意義な観察会でした。



武尊牧場周辺の植生 6月12日（土）当協会主催（総務・企画部会 会員資質向上研修）

平野がうだるような暑さの日、武尊牧場の涼しい高原で自然観察を行いました。協会員19名の他、尾瀬高校の生徒9名、先生1名が参加し、亀井理事長の自然解説を聞きました。リフト終点（標高約1470m）から武尊避難小屋（標高1758m）まで標高差約300mを登りながら、牧場内、ブナ林及び亜高山帯針葉樹林の植生の観察、さらにブナ林から針葉樹林への移行の様子を観察しました。



あかぎ親しみの森整備（午前） 6月13日（日）森の会主催（緑のインプリの森部会）

緑のインプリの森整備（午後） 6月13日（日）緑のインプリの森部会

終日作業に適した曇天の空模様のなか快い汗を流しました。午前は「森の会」主催による「あかぎ親しみの森」の整備に参加しました。参加者は42名、内協会員15名でした。作業は枯れ木や混み合った木々の伐採などでしたが、現場までの往復の歩行は結構よい運動になりました。午後は緑のインプリの森に移り、数班に分かれて境界の下草刈りや枯損木の伐採・玉切り・集積を行いました。経験の浅い人には経験者が付きっきりで指導しました。



緑の窓



赤城山の生い立ち

講師 日本地質学会会員 菅野重也先生

平成 22 年 5 月 15 日 赤城山の小沼周辺で行われた研修資料の抜粋

赤城火山は更新世中頃（約 50 万年前）、足尾山地と古利根川の流れる第三紀層の低地帯の間に噴出し、4 つの時期を経て発達した。

① 古期成層火山形成期

約 50 万年前から火山活動が始まり標高 2500m 位の富士山形の成層火山形成。その後山頂部が大崩落し、山麓南東部に大泥流（梨木泥流）が走った。この後、長い休止期。

② 新期成層火山形成期

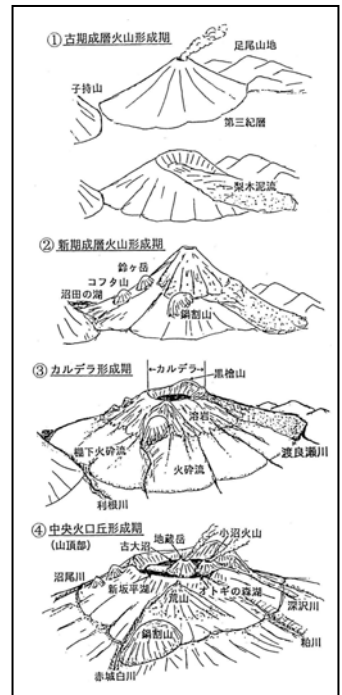
山頂の崩落部が溶岩で埋められ新しい成層火山形成。鍋割山、鈴ヶ岳の寄生火山形成。古利根川がせき止められて沼田湖ができた。その後長い休止期。

③ カルデラ形成期

約 15 万年前から始まった大爆発型の活動は何度も火山灰や軽石を飛ばし、棚下火砕流などの火砕流や泥流が谷を埋め、山麓の広大でゆるい傾斜地が作られた。約 4.5 万年前、山頂部が大きく陥没して南北径 4km、東西径 2km のカルデラができ、水がたまって現在の大沼の 7 倍位のカルデラ湖ができた。現在の最高峰の黒檜山はこの外輪山。

④ 中央火口丘形成期

カルデラ湖の中に地蔵岳火山と小沼火山の二つの中央火口丘ができ、カルデラ湖は古大沼、新坂平湖、オトギの森湖の 3 つに分断された。「鹿沼土」はこの噴火の軽石。新坂平湖は沼尾川、オトギの森湖は粕川に排水されて水がなくなり、古大沼も沼尾川に排水されて小さくなり現在の大沼と湿原の覚満淵ができた。その後の赤城火山は、2.1 万年前から静かになっている。



群馬の日本海型ブナ林

当協会理事長 亀井 健一

群馬の上越国境地帯は日本海型植生

群馬県と新潟県との境界には脊梁山脈が横たわり、この地域一帯を気候的に太平洋側と日本海側とに分けています。国境にある谷川連峰、利根川源流部、尾瀬では、群馬県側になる地域であっても、降雪が多く気候的には日本海側の特徴を持っています。また、武尊山は上越国境から離れて群馬県側にありますが、降雪が多く同様の特徴を持っています。

気候は植生に大きく影響します。上記の地域で適当な湿り気のある肥沃地には、群馬側であっても日本海型ブナ林が発達しています。

日本海型ブナ林の構成種

代表的な植生として、玉原高原・ブナ平のブナ林を例に、観察例を挙げてみます。高木層を構成しているのは、ブナが圧倒的に多く、シナノキ、ホオノキ、トチノキ、ハリギリなどです。亜高木層にはコシアブラ、カエデ類、ナナカマドなどが、低木層にはタムシバ、オオバクロモジ、エゾアジサイ、特定の常緑低木、チシマザサなどが、草本層にはシダ類、スゲ類などが見られます。

雪に保護される常緑低木がある

雪は空気を含んでいて断熱性が高く保温作用があるので、日本海型ブナ林には冬期、積雪に保護される常緑低木が生えています。上記のブナ平では、エゾユズリハ、ツルシキミ、ハイイヌガヤ、ヒメモチなどがそうです。これらは太平洋型ブナ林には生えていません。これらの常緑低木や上記のオオバクロモジ、タムシバ、エゾアジサイなどは、多雪山地に生える日本海要素の植物（分布の中心が日本海側にある植物）です。

なお、ブナ平にアサノハカエデ、テツカエデ、トチノキなどが生えているのは、このブナ林の土壌は湿り気が多い証拠です。ブナ平の積雪は 2～3m になり、水分の供給がよいからでしょう。



玉原高原のブナ林

<ヘビの話>**第3回****生物としてのヘビ**

財団法人 日本蛇族学術研究所長・医学博士 鳥羽通久氏

マムシのように胎生のものもいるが、日本のヘビのほとんどは卵を産む。ヘビの卵は鳥の卵に比べ、殻が薄くて柔らかく、乾燥に弱い。そのため、たいいていの場合地中など湿り気のある場所に産卵する。産卵された卵は、白色で互にくっついて卵塊を形成するが、例外もあり、ヒバカリの卵は卵塊にならず、水分を吸収して大きくなる。産卵は6月下旬から7月で、この頃になると卵を持った雌がよく日光浴に出てくる。

アオダイショウやシマヘビは8個から10個程度の卵を産むが、ヒバカリなどは数が少なく、2～3個しか産まない。一方、数が多いのはヤマカガシで、20個を超える。最大記録は桐生市で採集された個体で、43卵を産んだ。ヤマカガシの場合、卵が小さいのと、雌が雄に比べかなり大きくなるために、産卵数も多くなる。孵卵期間も、アオダイショウなどが2ヵ月かかるのに、ヤマカガシは40日程度と短い。



アオダイショウの産卵

<協会の声>**「自然の解説者養成講座」を受講して**

八期生 大谷正明

自然に対する興味・関心が強いという方ではありませんでした。神津牧場で「たまごたけ」を教えてもらった時からだろうか、赤城で渡りをする蝶「あさぎまだら」を見た時からであったのだろうか、憩いの森「自然観察会」にも出かけるようになり、少しずつ樹木や花木を身近に感じるようになりました。そんな時、自然観察軽登山への誘いを受け、出かけた折に亀井理事長にお会いすることができ、幸いにも平成21年度「自然の解説者養成講座」の受講機会を頂きました。

街中で見かける木々の名称でも分かればよいと思う程度でしたが、洗練されたプログラムに基づき、生物・土壌・環境・野外活動から非常時の救命救急法に至るまで、幅広く自然と親しむために必要な講義を一流の講師に学び、自然体験を実感するというものでした。毎回配布される資料も内容豊富で専門的なものばかりであって、用語のひとつひとつにも緊張感を持って臨むべきものでした。

講座で学んだ竹とんぼ作りは趣のあるものでした。野外学習では自生するヤマトリカブトの観察や風穴の前で冷たい自然の風も体感しました。爬虫類講座では「まむし」を身近に見せてもらいました。きのこや昆虫の種類の多さにも驚かされました。きのこの学習をした時には、「寄生性きのこ」という所が目にとまり、国立劇場前庭の「駿河桜」が脳裏をよぎりました。ナラタケ菌の侵食により樹勢が衰え、大きな幹は枯れ、切り落とされ、痛々しい状態で存在感を失っていた姿です。樹形といい大きな花びらといい、ひと際異彩を放っていただけに、「植物寄生性きのこ」の威力を目の当たりにしたような思いに駆られました。

また、講座を通して県内各所には自然を体感できるすばらしい施設や整備された場所があることも知り、平坦な東毛の地から見ていた群馬の山々がより身近なものになりました。

まだまだ知らない事ばかりですが、これからは土や木々と親しむ生活に張り合いを感じながら、協会主催の事業へも参加して、竹とんぼ作りや自然観察会への誘いができるように努めていきたいと思っています。

<協会が実施する事業・研修会等>

実施日	内容	会場
平成22年7月25日(日)	森の体験ふれあい事業①(木工体験)	赤城 木の家
平成22年8月8日(日)	前橋市パイロット事業①(水生生物)	おおさる山乃家
平成22年8月14日(土)	インプリの森整備④	インプリの森
平成22年8月21日(土)	研修4(昆虫の集まる花)	前橋市総合福祉会館
平成22年8月22日(日)	森の体験ふれあい事業②(草木染め体験)	赤城 間伐学習館
平成22年9月11日(土)	インプリの森整備⑤	インプリの森
平成22年9月12日(日)	森の体験ふれあい事業③(自然観察)	伊香保森林公園
平成22年9月26日(日)	前橋市パイロット事業②(ネイチャーゲーム)	おおさる山乃家
平成22年10月3日(日)	全国育樹祭	21世紀の森
平成22年10月9日(土)	インプリの森整備⑥	インプリの森
平成22年10月10日(日)	森の体験ふれあい事業④(竹籠作り)	伊香保森林学習センター

<編集後記>

緑がますます濃く、新鮮な季節です。緑の森林の中で思い切りうまい空気を吸い、身近な自然の恵みを満喫しよう。10月3日は全国育樹祭、みんなで参加しましょう。(宇)